

〈連載〉

ドイツの建築・すまい随想

第4回

ブルーノ・タウト旧宅と その保全

お茶の水女子大学 名誉教授
(株)木構造計画 代表取締役

田中 辰明

ブルーノ・タウト (1880~1938) がナチ政権を嫌って1933年に日本に移住するまでベルリンで住宅供給公社“GEHAG”の建築家として多くの集合住宅を設計したことは本誌で紹介した。タウトは来日するまでベルリンの郊外のダーレビッツ (Dahlewitz) に住んでいた。1926年から27年にかけて自ら設計し、1933年に来日するまでこの住宅に家族と共に住んでいた。筆者は1971年以来ベルリン出張があるたびに、今回はタウトが設計したこの集合住宅、次回はこの集合住宅と決めて写真を撮り続けてきた。日本人として恐らくタウトの建築を一番撮影したのではないかと自負している。ダーレビッツのタウト旧宅は是非一度訪問してみたいと考えていたものである。

そもそもタウトは集合住宅を多く設計したものの、独立住宅はそれほど多く設計をしていない。ダーレビッツはベルリンの中心部から南に約25km離れたところにある。ここは既にベルリン市ではなく、

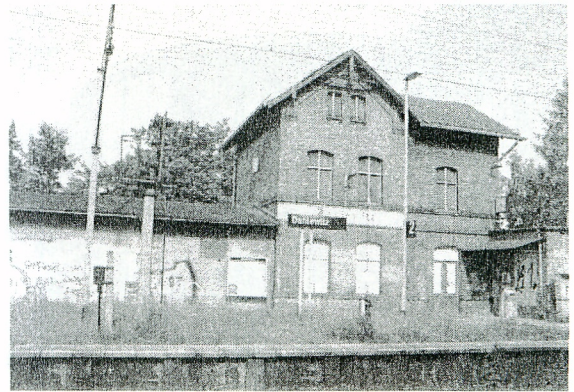


写真1 ベルリン郊外のダーレビッツ駅

ブランデンブルグ州に位置している。と言う事は旧東独の土地である。東西ドイツが合併し、疲弊していた旧東独の復興は目を見張るものがあるが、これもドレスデン、ライプチヒ、ポツダム、ヴァイマルと言った観光資源に恵まれた都市での復興が著しいのであって、それ以外の土地の復興はまだみだである。ダーレビッツもご多聞にもれず、復興には未だ時間を要するようである。

平成19年6月にベルリンに出張した際にタウト旧宅を訪問したが、ベルリン東駅からS-Bahnという郊外電車に乗ってたどり着いたダーレビッツの駅(写真1)は、昔は立派であったことが偲ばれる駅舎も壊れたガラス窓にはベニア板が張られ、ホームも雑草が生い茂っていた。ホームに雑草が生い茂っているということは乗降客も極めて少ないという事である。そもそもこの駅は無人駅であった。予め調べてあった住所を、駅の近くでビールを飲ませている一といっても全く客もいなかったが一店の店主に示し、旧宅の場所を突き止めた。

駅前の比較的太いLindenstr. (菩提樹通り) を300m程西に歩くとWiesenstr. (芝生通り) と直交していた。勿論この間、誰とも行き交わない。このWiesenstr. を北の方角に曲がり再び300mほど歩いた所の左側にタウト旧宅は現れた。タウト旧宅がある芝生通りは旧東独の道にしては極めて整備の行き届いた道である。タウトはこの道を通り、ダーレビ

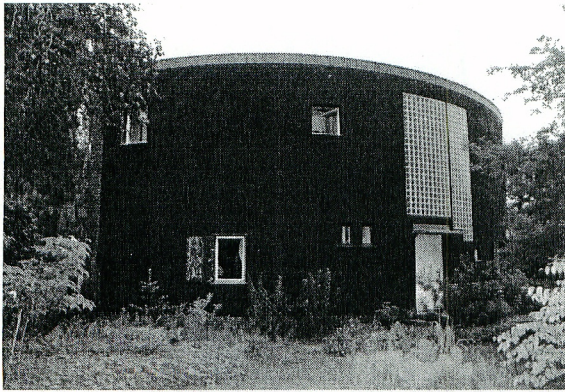


写真2 ブルーノ・タウト設計によるタウト旧宅
(延べ床面積264㎡, 敷地面積2,500㎡)

ツットの駅から電車に乗り、ベルリンからスイス経由で何が待ち受けるか分からない日本にやって来たのであるが、その時の心境は如何なものであったか。それを考えるだけでジーンと来るものがあった。

タウト旧宅はチャコールグレーに着色された円形の外壁、一部にタウトの初期の作品「ガラスの家」(1914年設計)を髣髴させるガラスブロックが埋められている(写真2, 3)。是非内部からも見せて欲しいという胸の高まりに、呼び鈴を押してみた。何の応答も無い。勿論この住人にアポイントを取って訪問したのではないので留守であることも致し方ない。再度ベルを押したが駄目であった。かつて日本のタウト研究家もこの旧宅を訪問し「ベルを押したが出てこない、旅行にでも行っているかと思いつめた。」と記述している。やがて近くの家、といっても少しはなれたところで丁度車で外出しようとした40歳位の男性をつかまえ旧宅の住人の電話番号を聞き出すことに成功した。今回は旧宅の場所を突き止めたことを成果としてベルリンの宿に戻った。

そして翌日から電話に電話、毎日何回も懲りずにかけた。しかし相変わらず応答がない。6日目くらいにもう電話が通じないなら諦めて次の町に旅立とうと思って期待もせずに電話を入れた。すると「ディップナー！」という応答があった。これは現在の住人の婦人の声である。当方は驚き暫く声も出なかったが、是非住宅を拝見したいと申し入れたところ、



写真3 タウト旧宅はドイツの記念建築物指定を受けている

意外と簡単に「では今いらっしゃい」と快諾を得ることが出来た。そしてまた郊外電車で駆けつけたのであるが、もう夕方の6時を回っていた。しかし夏至を少し過ぎた北国の初夏、太陽はさんさんと照り日は容易には暮れない。十分に写真撮影も可能であった。

今回はディップナー夫人が温かく迎えてくれた。「タウトは日本で、日本人が価値を認めていなかった桂離宮をアテネのパルテノン神殿と比類しうる世界の名建築であると褒め、日本文化を著書を通して世界に発表した日本の恩人である。」ことを述べた。しかし「タウトは折角憧れの日本に来て、当時日本はナチスドイツと結んでいたため、ナチスドイツから逃げ出してきたタウトは公職に付くこともできず、建築設計の仕事も殆ど出来ず、失意のうちに伴侶エリカと共に1936年トルコのイスタンブールに去ってそこで亡くなった。」事など筆者の知識を披露した。このディップナー夫人とは話したいことが沢山あった。しかし旧宅の中に入れて頂いたと言う感激と写真撮影で、本来聞き出したいことも聞けずに、ベルリンの宿にその日のうちに帰れることを心配して辞去してしまった。

そもそもタウトがトルコで亡くなり、伴侶エリカがデスマスクと遺品を持ってタウトが住んでいた高崎の少林山達磨寺を訪ねている。そのお蔭で達磨寺にはタウトと文通のあった柳宗悦、上野伊三郎、水

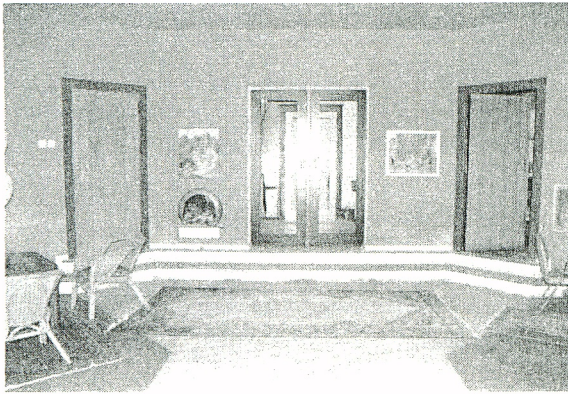


写真4 タウト旧宅内部

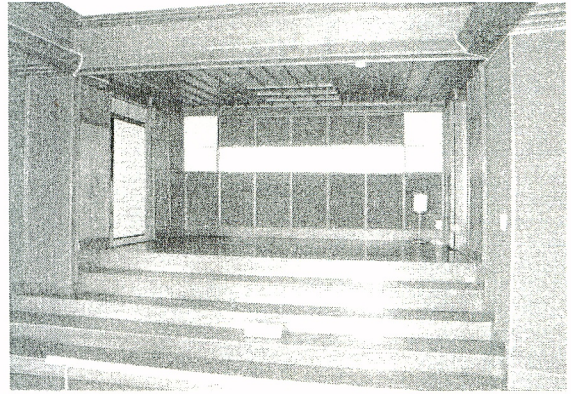


写真5 熱海市の旧日向別邸内部(タウト設計)

原徳言らの書簡が残っている。筆者はディップナー夫人がもしかしてエリカの消息を知っているかと思い、それを聴こうと思いつつも新しい発見にそれを聞くのも忘れ、時間を費やしてしまった。

新しい発見。まずは旧宅の居間がタウトが日本で只一つ残した作品、熱海の日向邸の部屋とそっくりなことであった(写真4 タウト旧宅、写真5 熱海日向邸)。本誌では写真がカラーでないので不明であるが、両方のエビ茶色の色彩は全く同様である。日向邸においても当時この色は日本になく、タウトはドイツから取り寄せて塗装をしたとのことである。これ以外に旧宅の建築設備を初めとして新しい発見が多数あった。今回は誌面の制限もあり、この程度にとどめる。しかしタウトがこの住宅設計に力を入れたことは事実であり、この旧宅に関し「ある住宅“Ein Wohnhaus”」という著書を残している。これはタウトの住宅の彩色に関する事を極めて丁寧に報告している。

写真6に旧宅の庭で撮影したものを示す。筆者の右が現在の住人であるディップナー夫人である。夫人は今までこのタウト旧宅の保全に少ない蓄えと年金を注ぎ込んで来たが、最近は傷みも進み修理の資金も尽きた事を話した。その挙句、筆者に修理をしてくれないかとの依頼があった。確かに写真6に見るように建物にはひび割れが入っている。このひび割れに冬季に水が入れば建物は簡単に崩壊するであ



写真6 庭から見たタウト旧宅(右は現在の住人ディップナー夫人)

ろう。「筆者も年金生活者で貧乏においては夫人にひけを取らないから無理である」と一旦お断りをしたが、「タウトの来日が無ければ桂離宮は現在存在していなかったかもしれない」とも考え「日本に戻っているいろいろの人と相談する」と約束をして旧宅を辞去した。

一方、かねてから懇意にしていたドイツのトップゼネコンの社長に依頼し修理の見積もりも取った。結果はその子会社で住宅専門会社の社長が見積もりを送ってきたが約500万円である。もちろん新築工事と異なり若干の追加工事発生もありうる。その後懇意にしている日本のゼネコントップに話をしたが、丁度談合問題で各社営業停止、罰金支払い、その上課徴金支払いと建設業いじめが続き「とても寄付どころでない」という話で今日に至っている。なにか良いアイデアはないかと気を揉んでいる最近である。